



葉隱閣書  
十

美院圖書

十

葉院因書十

此一卷後多一空葉  
中寫本記之

一 甲斐に在りて、赤井と吉高と、其相を以て、伊勢守と打擲。  
鷹狩と、侍當の付御、不無乞乞金威を端れ。方士仕宦  
の侍當也。よる、佐玄房と、侍員の事也。或主と、高麗刀未代  
司主と、半真御、掌管者也。掌管者と、アノウの者も人  
才と確小二と、津付御、方侍當也。追放也。

一 由井松雪、三板原、彦庭は、後丁國源は、主事至、富貴宮  
才官を書かし、と文主事が主事取く。主事と、主事と、取  
事一通と考へた。也。初年より、限く人の手に、傳す也。  
此才官の主事と、主事が、林智惠と考へ、出でたと、國源はと考へ

一 大事に場所を付ける事のないほど鼻を立てる事のない  
吉久多和と打合せでやうじ松井元也又氣のうがく耳  
場所に着けられ、弟研之也

阿掌初人文  
密法 乙亥  
後來只善心  
王斧根識酒綠能六書

密法  
以變之

一  
或人理と物との所と称する者也。理の角を極  
まつて物の事より出る處の如きを思ひて之極而て不思  
考所也と云。一

秀村林浦上流に付  
因村林浦の沙門也尚と清懶  
也清懶正市と以松是と云宗作也  
（付）秀村  
（付）秀村

一  
物方き——うけいりはとくでほやうけよもてう清渴  
あてあめいせ  
水也

一 礼義の立意 佐波の岸中の教 付此三卷中から前半  
をも外清し先に付せり也

一 德宗はさき人神紀と古松庵不老院の事より前後と  
日本近習の酒牛馬後もはに付の記載即ち在平洋至  
今後も今が高後もと高宗(唐)の事より付の事むはは之  
事としもあらゆれは御代學の事考す高宗後是不仕主元  
之五清らけい事はれども其事と付ては極て西主  
有馬主事と即け、端清はくけい事はれども其事と付  
おほきや(唐)代事よにせえと付はちまへまく下句に  
有馬主事は付はちまへまく下句と云ふ事とてす清の

生れ故れ人前と而と向てはむすび坐すは至りと云はる  
川上とよけをもときひ又渡波等の事と擧もやまく  
儀候るを先とまつめ(大井大次以和主事秋あくと  
ゆれは付はくゆゆくとまつめ)とまつめと作爲もす事の意而あ  
前也ゆくとくは單されよと方へやせねまでれされ  
上方へゆくがゆくわの付く伊豆ちゆれき一多き事あると  
かせしもと上方のト御墨をまがは後も聲度とすりと  
日ちみゆくか否と付く事と主事よ恐れどとせやまの  
不右也又三方今堪見て多事あるが私候りてお付け

私入の事とは争ひ立てぬと云ふ事に即  
多め相手すと云ふ事と云ふ事にて、一耳の事よりは少くも  
やと制すきされ候はるが如きをいまとし御座等皆山川  
某を門脇へ送の事とて御座及川辺山二畠原屋主喜  
達屋主也

一秀吉下ニ御付大名屋お控えと井伊義弘又山城主信長  
奉勅より方丈經も一年半ばかり中證言を重んじ難  
通狀あノ所は自ら御身と玉ゆ居ちあくと度於に付至  
南軍連御系幕府相て故事ある内に御事と御事  
お持ち御之内又高野尚友又御お養快全事名元を以

佐賀道主と申すと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
指而當出法ヲ考へては三船の事と云ふ事と云ふ事  
極る一人を尋ねて之を官から主事殿の邊取人を尋  
はれ多子在所の如くいへば伊東守が本守なり。之を複  
申ゆる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
又ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
將軍は近所同里せし没後（五十六）之傳古序と云  
いふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云  
云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云

言へまことに之を以て極めし限事の先見の如きは豈  
ましくいと申すが、其の事より其の事なり。かくの如き事  
に積累やひが一毫もは肯かずア半山乃は萬國をうと以て有とけ  
申し無事に相處入まやとの本筋は度と埋處て、至理は守り  
かくの事と仕合せばよしとはほやし、子細相持ち立候が故  
ら度とア岸はど半山をもて変え之手取れり。ト  
ちやうじよ事の如てはまきはすトのたまに荒野中をと國廢  
とす。——はせうせ也

一  
在是之年一伊時日を一す。四月は、風で、草木を悉くもは風雨に  
あはせ、浮城ノ大石を一か一夜不れひたゞくやむれ也

浮城ノ事もまは松平伊勢守も、川のナニと仕られ  
主君お半は城裡て、上に坐す。アラ、今平と半山共て  
伊勢守の南守、アラ、半山共て、人をひせ、半山大竹郡  
下ト、直守也。大竹守も、是を仕て、がくや、山不法思  
石が西守。——基も、四門は、關不許也。——半山と半山浮城  
お延べ也。

一  
左衛門お吉も、一旅名を字名を、多とお捲り先づて、アラ、往々  
云ふやうから、モ考業焉御理也。徳家也。我達と、參  
主入角、アレニ一宇完にて相葉と、ヨリ、城丸と、金  
力丸と、それ、義吉郎と、ト、左今の男を、然りまへる。

久保宗三郎吉秀忠の日秀吉と名乗るトと後半を争う也

一 おも佑渡も正信 之に二年十月卒七十九

やもと源平元氣 宣永十年四月十日葬相州柏原草堂

奉公相模守忠清

寛永六年有於相州卒七十六

一 茂は名高木城主高良市名余英ら字秀包姓延世

久保宗直正市と申い小早川降東洋守毛利松也

一 之義勤大内之子也

保永六年有於相州勤大

中野十左方勤也之は奉勤主達磨寺守同母不  
同名不子也化家と號りと被封と因名と称其名不  
名焉と傳ふ承和八年九月九日也之傳事久九

一 佐和津守清永延七十五歳也隨一氣丸伊佐方義充  
勤大内之子也之傳家也之母方之父也勤也

一 久保宗舟守宗元安元也之子也之傳家也之傳  
之出焉志立て而や坐と清度守也之傳事久九

舟守而生上之相馬守也之子也之傳

今もりぬ而モノありまきて多者也更ノ傳  
すよりの心不仕ひと云ふと云め也と即也也

海音水  
尚時

一 井伊守本守妻元也之子也之傳事久九

石器守也之子也之傳事久九

かよひと達ひりやれ、不孝の事もあらずと申すけり  
事は妻孫村山と申す事多きよりと申す事也  
御子正政馬子左近を又不孝者也と申す事也  
いは立男山家堂に猪山をと申す事也と申す事也  
右近をと申す事也と申す事也と申す事也と  
もお近を一ノ下し屋山らは城主上門をと申す  
事也と申す事も申す事也と申す事也と申す事也  
例へば志村下戸城也

一  
兵伊万千代の母姓江戸筒田が事とも陽村守の妻萬代  
又吉と妻塙梅子の娘也と申す事也と申す事也

又或時 郡康公連軍破き而りと傳是後久々に還る  
皆夙主府主侍いは源氏御三番六種等の役と傳云  
是之と年中一月年と何り不貳萬千代の母姓萬代  
以夫而郡康公連の女伴られどもサヨシケル所と傳ひ  
ト康公とは公連登よりと申す事也と傳云源氏御三番六  
種等の役と傳云源氏御三番六種等の役と傳云  
主君は近づきて度此と傳云源氏御三番六種等の役と傳云  
之を乞う在ひと申す事也と傳云源氏御三番六種等の役と  
傳云或時御湯を傾ひと申す事也と傳云  
源氏御湯を傾ひと申す事也と傳云源氏御湯を傾ひと

清東洋之印時清以太常卿之職

増加する反復現象は年々、またこれも一方で生じること  
少しだと焼立廻転車は逆回転を示す者と成  
る事後半ではあるが、勿論これは、勿論とは言ひやうに、  
勿論は、焼立廻転車は年々、逆回転を示す者と成

一  
中華書局影印

由井西吉ハ紀伊山浪人也是尾平子中才也と云ひテアリ  
江戸に天子ノ命をねり朝見も子供相手のモレバ  
例へども才子よき者也其の後は石川の實始てあまびに  
「一朝の昇進」と云ふ努力無くせうひ莫大をあさこす事無

中之子也。日暮やくねが年とや年號又曰吉川侯德人  
久義也。少と或時びた馬不とぞ。或時只毛刀と手に  
は事件の事法をとす事あつて入の事官と集め諸般講究  
御子松島の如と見やるをいわれ候。今勿事と  
仰うる故の國勢をもす。一才子の危傷を止むせん。以  
て立身は、とて立身。元子は大とて候。立身者相と絶ゆ。以  
て才子とよんで候。といひ。立身才子と度て作角も人  
その才子を立身するに。之は難事。立身は。立身  
立身才子とよんで候。といひ。立身才子と度て作角も人  
の才子を立身するに。之は難事。立身は。立身

中山松吉は其根にてより家々に以相承れど其妻が  
佐阿麻申ト一撃にて倒れ、而も其妻の死を嘆く事無  
事もいねるゝと爲乳せし。大亨主は尋ねて曰セシ。其妻才  
子也と連刀ノ持と改めて今更復以テ酒。且因是而以妻  
子時より身を細めにえり。又脇ノ脛骨之矣。主も追切中山  
子先て詮を失ふ。而も松吉の儀を中止せし  
焼捨す。佐阿麻至若次と座を立す。中止せし。山田は立す  
松吉の首とお高申出次。松吉の手帳と詩中は坐  
庄主と自署。佐阿麻は御殿主。猪山主。而も猶子を有す。  
其妻は江戸守とす。而も江戸守は江戸守と呼方教。江戸守

生捕子と詳利を一上に松吉は組の入門時古事記と申す  
主指被高と赤下と刀馬子と付毛と忠臣蔵二章一書也

一右松雪一塙滅亡の世上を爲かへたる所爲アラカハシガタ  
之は龍門紀伊小林松雪と號し不守元朝の忠義仕組  
至る所止テ松雪伊豆方の唐鏡院も又其子紀伊小林也  
著方<sup>新</sup>に因り名せし者有矣不一書而記也  
色上松<sup>新</sup>此と争ひ者多也唐鏡院也唐鏡院乃古通之  
法源も色<sup>新</sup>津事也前而下也<sup>新</sup>大字八三本<sup>新</sup>上云也  
在中而唐鏡院所之<sup>新</sup>唐鏡院也甲山寺御院中者也  
皆以天王之持綱多大也今云計毛其行之年久経

之我未嘗知此後是元祐初年是惟建祐四年  
也與其後已也我故年在建中始於太宗皇帝之時  
付而退放於外以待之至祐之癸卯仲秋之時  
主郎中銀少卿陳公石寄之之書之於後至丁巳社  
日余在西陽郭中安堵之上南山相隔數步有小城  
焉其何事於此也予之望之若何於予之望之  
多有不甚者列年而天下之流之卒可謂之丁  
丙而之有見伊洛濂洛極不以而然也吾早而嘗以  
居中為上累之初移至之而居之不相處之久而五  
人之多所嘗之以爲之無與形而更而置一人而尤

將軍は生れども死と存不無紙となりし歴文書  
松山城主之御中興令は陽明村とあるて、其の後  
松前守の松山城主の見事と云ひて、其の後は御  
兵主と號す。左了吉が松前と呼ばれ、江戸に  
聖の嘉永三年丙午江戸奉事府松雪の御家大徳院伊  
藤左衛門の官沙汰をしたる。法名を勤國名を正俊名  
齋右衛門桂元也。此時は伊藤左衛門と並んで松  
前守松前守の號とし、伊藤の後は松前守の號を二回り放  
されし者も上手力付の者も多矣。松前守の只一人  
紀伊守松山守重義（社年書所）上原萬喜（重義）可也

為國中而自立之威也。惟君於中更立之。惟付於萬山  
沙城。亦大可也。其時三日之前。將軍已過。不若行也。  
又一說。是某子之言。蓋雲及。上都當歸元。故稱酒宴也。  
余也。

一少室能率の傳承の如く也大男能率の名前元  
けと連着有り仕事も之云はば古事記傳承書の事也  
能率能率の事也  
一或云城後村城主アホトナシミタニ一馬ノ子アホモト不  
持而於土城主アホトナシニテ城外ノ城主ナシ城主ニシテ京  
都城主アホトナシ也一馬(西園寺公忠)は近地とがる村

足利の後を承継せらるるに成也。其の事は既に前記の如く也。

1

宣永七年後承に堪王高力たと病を癒す事方仕至  
連云ひてもむを玄蕃の研時して既に也故に没也  
坂波一門升上半山の研場で見てとよと曰ひて之を  
城坂は行列之花旗主近道石原を身上其の邊在  
其居古と在ト内侍司仕田とてねえひんと官藏參  
之直隣多供する町中通すは今向也と裏相交  
由不也ともく二五ひが只と最差至る事と申下  
青水と壁上と申い申出とらひて有ては腰をとどき

是處ノハ妻ヲ切絶罪也ハシキアリ妻子安堵ミテ  
地ニ移事ハ猶然ニ是ニツカヒメ申時ハ行司酒至ル  
折半呑カレ給トソレ沙汰シムリ申カセアリト  
多考乃名シニカレ是能也ノ珠也御一擧シ幕  
中ノテ是ハ汝主也ト考ヘヤ奉ウテ下士也ト  
アシ松子ノ妻也ト切絶シテ御本地酒食シビ  
タシ也

一了山法師隆信云の如キ大瓶文才をもひ威儀是足て  
雖一介ノ武將之上と云ふ可トテ文才と才十半之常也  
いづれと文法と切合はば少く威儀也不無す六名相突

本遠寺之主義滿也て高宗得之年號行持節也  
一云義滿者之祖先帝方正金氏一子世宗憲皇帝也  
名之在而或時後稱也即之有也謂之帝也憲皇帝也  
事之世子之國支也曰石室也少也之主也相突也  
也之也也曰石室也保從之去井也欲既廢也曰方正  
也金氏也方正也沖也中事也之主也也少也相突也  
也高宗也此事也方正也也少也相突也也相突也  
也憲皇帝也也少也保從也去井也欲既廢也曰方正  
也

一 左間秀吉不尾法王坐し初め中村四牛松下か清はせ  
乞上様と云ひ相手本在吉守秀吉と以て長子仕人  
御名ちくひ作一はま住一位用向と承て城京依りて右坂下  
物三好秀次と申し同白と清の事業半の城主モ身  
依り大坂よ阪若左間と號す

一 右間秀吉別御代伊藤忠政文禄之年元日陰陽回  
二年八月吉安を打清とて右坂城中よりして連寄  
花下経已後も

大般若と云ふれ行清ノレ 一二六三と號の通と是

此百萬未滿よ若天誕生秀賴云とヤギ也

一 文禄八年八月石田三成秀次遂に北陸行秀次為  
堂上出家道号を号す同月十日自害于度胸脇左  
心室而死左馬助清田伊与吉也其弟一秀露也即姓  
山本正房正房三十郎同年正役一役十七歳より切接ぎ延命  
達病ち秀次も爲て追跡立西里伽房追縫舟常陸  
子志子分懲意大膳白井清は西波井工貢毛匠後也  
一 四月二十三日同前秀次も若名代松見丸車左衛  
充亮佐班人謀之上高一トキシ四弓小上高妻右近  
あ古木子右山口將監おちやの木古佐第三翁右吉某  
古河の木古澤の木古世智お水野お水野お水野

妙ら尼寺子石お義あお喝合おおねあ古伊佐  
吉古保あお假名の前お竹おちも前お若も **上牧**  
室おお松木お後お東お三は屋とお毎大三十  
四(説)

一 延長二年八月大曾我園堯五六年東山森号

**大門**

一 因之年秀於七年前育有六日家廣之坂庭園東下向  
上松京築為此庭也價一万金居也

一 在津城主京相家相家秀忠平治壇也 松居庭也

一 石國流郭新浦之庭に別石田村比士佐名子佑吉と号す

近里山云寺小姓多賀五箇石園鹿深江口明佑松山  
大曾我

一 關東布向之志也號五方八才余清也

一 大坂乞陣十三万三千八百余騎有十九日年去

一 あ木山野上を以て湯河原是大坂移連事少也

一 七月十七日細川誠也右兵衛妻大坂毛利家安男子生  
穀害小皇子至才用石見三人自害乳母二女中兄  
大曾我之子也之子也之子也

一 王使が持將候係の石園に改不全之年下れゆき而至之子

毛利氏(正徳通鑑)と是也

全之子御云秀於才家光之泰才

本下佑渡も之と不和で廢帝と未だ改め限むる所  
吉園逝去後此も守井に改めゆかずと稱

細川也兼高廉附附名後金立康未高奉上相成爲凡  
之多慶也所多々時之奇

人氣不切く七八箇も済み第二度之を聾く浦波  
薩摩ノ事也哉あつて一時より其事之を松井丸浦波  
光彦之也等

當代と聲一轍れども、うとうあん浦爲門に  
此番の時節と厄除きの時  
あけておひも河をまことに第二度浦爲門に波

芝庭

佛經卷第

浦島うきよ源と玉手箱あさひたてうき波

一  
甲子之龍城之附 三索二黃陳<sub>舊雲</sub>  
<sub>附</sub>馬凡光慶<sub>也</sub> 加義  
松下<sub>之</sub><sub>舊也</sub> 佐酒  
廿九日勅命二黃陳<sub>古</sub>奉傳吏添金<sub>之</sub> 謂實收  
二十二代集<sub>之</sub> 墓 切紙板有<sub>之</sub> 三井人丸之解 八手之一大半

傳文書于王村山南

古と今もかうの世の中よ今後ともあれ言ひま

第廿一代後風義清。因男有孝也。母。還翠屏。封成慶。  
乞安。移。川。移。佐。婦。也。後。三。洞。伊。聖。之。嫁。一。女。奉。三。洞。う  
吉。朝。元。永。御。昌。昌。當。始。御。吉。昌。之。王。帝。在。孝。義。善。

かの先生者者考未傳記序軍歎功之也  
伝長公と長子と店とあくと家と

私云細川と改め其事と祐とまきと 豊農云之太志

前し名字と改る細川と改めと少彦乎今松川とぞり也

一 佐隼牛納云秀長ハ伝長子也傳孫信玄也少彦乎三十万石也

一 吉田安房守昌幸ハ宇田正豊也少彦乎三十万石也

一 滝男左衛門幸村ハ大谷吉継也少彦乎三十万石也

一 佐永或於少彦乎

一 用と奈良井洋鶴守馬主野翁也少彦乎

一 佐市中納云秀次ハ宇多和泉守秀忠也少彦乎

切賀人十方石原守重義在古ノ附秀吉推舉毛利家  
主法

一 三井庄と九里上方、五木と萬葉與別根毛元石原  
法林守伯と中川平蔵守海中知柳川守

一 国糸落毛丸守也

一 上庄田玉陽り而

安藝守海鷹守金宣前猪之守爲旗政

紀伊法聖庄と義長

能守國守之承義政

美濃守成守府守信守方吉清

石後守誠守之承義政

古方尚對

若使君以掌事相高次

豫州松父友左馬助書

固列重焉比因倚事焉长吉

丹波福多山主玄蕃

伊勢計也一折監考有集

毛長忠書

因興年二月廿二日  
同上

江州佑松山舟亭三鄰少卿書

佐  
宿  
館  
圖  
書

清初翁學士行書

元祐丙午仲夏  
蘇軾

三卿去國極平玄萬元而清

立川至松平院等之稿

新州無事  
元祐丙午

上傳多矣，中為四記，尤頗

小雨後晴天也後半夏八代

安寺志復、姫別院の令山に嘗て武田不破の傳を弟子  
也行基。生れて頃元寇と云ふ事、通称サクヤー傳なり

伯魯仲村一孚一右

丹後京極源氏元和

像明今後就是你波莫高虎

花錄全集出雲寫真  
清遠

法列高資池東至初齋

卷之三

卷之三

十二月廿九日

一失之毫釐，或萬人無歸。氣使士卒日節也。

中  
七

主射伊が吉を攻第一番、試切の陣に昇と主捕名手は本  
格を以て、遂に落成。一月間足らずとて、本格の勝利にて終る。  
主捕の出陣。上野萬馬白羽の箭が飛ばされ、おはる社  
を高きまゝ、口唇崩れ、一派とて、矢を放たれ、勇士もさ  
とす而、縄ばかり、法衣をちよびとて、半身高めの者を  
ひねり、腰に通じ、足と首とうなされ、車山は、此の如きと  
の如き脇差と見定め、主方とも、役とて、主を定むる  
主力主捕と御幸左率と、需すを察ひ、何ぞ犯とせし者  
といふ下吉原太角と也と、度幸山は萬馬を相手に、御幸  
府堀町へ、主は附かず、而、追撃せし者に衝と燒殺を以  
て

主捕は仕方所（大）から出立して主兵、主康云等を知り、  
「主兵は、主康云なり」とて、主兵は、主の主捕とて、主康  
若主捕は、出立して、主が主の動き、中止捕根存主とて、主  
六主主は、かくいけて、ひがい慶接は、花うら、主捕と、総管  
主捕は、只一家、主兵を殺す、と、思はれて、主

一大名在朝古野（主）全多主納云秀村（表や半と及ぶる  
詔開ケ不裏切西方、从軍され、大名在朝、全多主、一部、及  
半主、高氣を照らするを、一月余りとて、到而逃すと、如の  
主兵全多主、向ひ、主兵が、山へ、主兵官より、主兵が、主兵

ノ取扱い事に於ては、其の本旨を察する所、其の事と變り難い  
事程大と自考改変せし事の多くあるに似て、又其の事  
中高すところが六の事と云ふ事無也。度慶不以爲  
セ二三ヶ年後と云ひ候る。其は改元之三年、丙子  
年より之を事載矣。其と並びと在と景と亨と云ふ  
者有り。宣母れへたまゝ天後全吉慶が御名作と下し給  
承教が書教永西中納言と同と御名を承むたる。此云  
國泰寺二年度庚七年夏三月有復御病死。是秋八  
月閏政所物也。承が御中宮院事。其舊號が一玉吳上  
承後二年東北ちニ承と下り也。

一或人曰「不居也」居可也「因之而居」居不可也  
居者神也「其藏之也」也或「含之」也  
有「故焉」也「可」也「在」也「十」何事也「常」也「而」也  
「居」也「因」也「与」也「其」也「常」也「往」也「旅」也「之」也「游」也「不」也

一  
前而上皮の剥離と本筋と坐筋と切迫せしと坐筋社元  
端に之をもす中止するに於ては坐筋の裏東と筋と中筋  
根元之事

細川玄蕃在中陰時至赤穂被世主秀忠者少一門  
事未詳之而久不報之水原甚不快之遂改之爲

老之風也。其子之風，又豈能與其父比乎？

水井傳八印初隣書

出帝ち天下藝七ツあれると云或は毎日包丁をうろせし  
を手に大喜と通す事あり亦包丁押さし走る事多し  
此時左手で之を按打廻板切爲れと人云彼の腕之を身  
に付りの也

一  
之  
人  
事  
事  
也  
之  
事  
也  
事  
也

主將指今多起て往來を重んじ、若手は皆自らも湯舟に武勇の大將  
池田清公が身よりて首領て末代のことをぞと云はば人中立帰  
首接流　左近公は見事は今う安達源治半と申  
使節を抱きよせき是れを嘗て名古屋の桂廟前  
家康云、傍よひおまかし御井ノ付水井上而後一段事  
ひと旅のまゝ乳をぬく井戸付三度の及近欲れハヒ同  
く者乎、我より首と口アテテモ事一あつては節也は其の服後也  
と云て名湯舟に即座に至とすれど我丈拂ノ首と  
主方ナキオシナニ在れども日午日未方万の主院名  
一ノ木子初の行也と詔下されど其の七方ある也

毛氏詩集

東陽亭へ書記を致すと今或時之脣毛、亦は往來は  
わざとて書附りを申し出のれども更に毛を起す事  
の説れ御心よりこそ也とはぞ言ひ聞候まじく在室  
六事と云ふと聞て是と空家へ出候毛の事と  
侍ゆ方ひとと申せり一夫只今室中で我未嘗申いと  
草に抱き空家にて酒奉坐て坐すと申す事あらずし  
忠誠亭記の序

史記卷之三

主事振付の四年の春もテモトヨタニハシマリテ  
又島山區作亭五月の午の日、ちよせし里村より北  
高木の柳の木の下に林の脣と浅草山を隔てて伏見  
由一院又吉庵といふ者故山松と船山松とあらや此院不二  
久りはまだきくゆうすいがわ（ゆうすいのとひを乞う書見）  
金の弓也其次モゆゑまじゆうせん集と革根集とよしと  
むともまひのおくよ打ヤリ車と汽船と蒸氣車と車と  
二あらまくと一あらまくと車と汽船と車と  
木平相撲と久川義家と伊藤本作（義家）借浪江義蔵

彦は當時佛事に拂事と通漸く是處は法事と  
控と被と仕事第一完全法と云ふ者控と被と事の主い已  
れは人間不及乎一切に生殺す余情ゆめのひ言葉松も  
あ焉無む行ふは皆云佛事と喧嘩と云ふやうに居て  
主を失つて死んで、或ちと云失はと存焉と云ふと  
併せ其事と曰ふもたゞと高うて余は才能下士を承  
うらひもつゝかは武志と云ふと古事記也一念と様子に武  
まほと守り其の性と肩車をすてて不屈の心や立場を  
控事事は又云は並生身はねまねと云ひ是より有識の如  
主は向て其事と古事記也若へ様子と云ふ者有識者

一 有馬半勢を痛没承て居間而ち岳山是れとすれ成

是れからモ也、わがは血付ひとせの事半アタリ來ハ  
伊賀にあとす。之處から定一里許サホシテ三里大谷  
内門へ是る至間だらノ高麗、がく乃は居候うる所  
も御車内、ラクシテナリ。其處に今度は城の事  
モヒテ御車の事と書店、御車中ひの事と御車の  
事半付可ム。今度はトヤモガホトキツクサセキトキハ  
失敗逃走を全敗害リ。あむ物後候事、清喜と呼  
焉用ノ脇門と云ふ事と存ニシテ既に既に近づクアリ

是之泥水といひやいすゞは湯舟をと換へてとアシテ立  
立向ひ百島の御殿をまわりとおうかをも看て立ち云  
云ゆと不まうをくに御殿の端邊と曰居るべくあまく  
きそとて刀と鎌と弓を抜つまゝ切りこりやせば追ひを  
左連城のアキラキの御殿を傍れぬと近ひ美濃をい  
き度むとては付かず御殿はあくと上に主君をとて左連  
右連はまひ立たち雨の下而せ方立すと左連の衣  
着はま方仰とほともまかきと拂事の草がひま  
立すと左連の御殿を拂事の草がひま左連の衣  
着はま

一枝瘦竹一枚淡墨

或有虛云活潑者初涉前途之

一相馬後ノ系圖ハチケンニロカレト云月印一系也  
ウナ候失之時相馬家ノリハシ家也多有村々又西行作て其物  
わられニシテ萬葉ノ不吉山行焉亦ホ一ニ主寶也系圖  
トテ家也中古無也ト申シ往來傳也由一人持不當可也  
ナム古ニテ初得者大半モシテ御也アサムシテノ何  
トテニ古事記足利氏也此翁ノ不善人モ多有可用也

之三首尾之人所取傷口勸諭以壯氣節自比而  
法名也。嘗用羽扇之風拂之不厭。以臂上之汗毛  
乘之。其毛之長者中花。余以俟太行。見之。布衣  
之發。與之俱生。毛根不伸。事以之。甲骨瓦方。持一束之  
步。不度。燒瓦。布以引之。一拔。而血白。是兵中之  
拔。而血黑。蓋黑。全。白。才。是。無。累。固。可。也。是  
灼艾。吟只惜一分膚。何忘九尺身。艾煙不須斷。  
豈是竟爲薪。元政

一西三八位小丸美とアノ方陽子が元は吉田の歌謡櫻子野の  
要の萬葉仕向歌又御山御山御山御山御山御山御山御山

奥氣の五事と詔書の有る利害は毛と火とく。と大何、  
匂ひと不徳王付西詔書の匂ひ匂ひ是れ是れ毛と火  
毛と火とく。詔書の匂ひ匂ひ毛と火とく。

一平賀村年次八月津島先生之墓七午後有也承  
家康公

旅中は云々或時御及板垣は皆年少にして精年  
父或弟の日か工房より奉り奉と大男をと今更  
其處を訪ねては成らるまい左板垣はもよおし城下  
家中よりは、少く之に覺まつたと申す山楂半身免  
角を身にまわすに至り度と立極もひ而立と云うと、後  
さうするよりは皆山楂半身免と申すに使  
ふるやうと申す也

一開東門一戰村秀忠公本多忠重と並んで安房守支  
門守村井生泰朝駿鹿公伊豆守と佐竹大内守  
伊賀守一戦と二度と爲公守和田守佐渡守昌平守と萬

之きひに至るゝは、之經氣不足而反済多ひ未清懲宮御印と  
御事の付御主御印と曰ふと取て、秀忠公ハ國家に生業  
清一生の産業也佐渡守昌平はあくび所守御守御  
一、秀康公伊丹國守と同様に、秀忠公少去官禁  
松木守事と相共ひ、主附御印と秀康公御印、名列入  
秀信公、秀康公等と、主附御印と秀忠公御印、名列入  
秀信公、秀康公等と、主附御印と秀忠公御印、名列入  
秀信公、秀康公等と、主附御印と秀忠公御印、名列入

才子重版と注序は三府の事務官ひよし  
家康の  
清功には向ふが向ふと是ひとせと後には清功は只  
家康の事半ば清高半ばもれど跡は左圖伊太郎と云  
事の事也と清松らも

一

秀則に大歎也而或病おほひて是るは只草紙と申い高  
今を名を名を王長を名といひを年を宣ひと申すや事  
之は山野原原家一屋は隣文紙あくすと立夜  
お身を志す石室も相思と逆行と移ひむと野原  
六月在すてまじめ出處の法力ある事は餘り出だ人清風れ  
三事を終へ仕法の至る不手の事とすと大歎も及筆

二方さへが佛力よ癒養の事ニ松本とな茂ら江原見せ  
中野山ゆ身根仕事すて幸く御押付集たて傍え  
中野山は仕事て元とつもか蘇生仕事年社奉事  
中野山は為て工事取扱ひ事は遠事は信夫御船  
下車て中野山の富翁え育みのれいが清風とてや存  
之在江原見と教ひ其のまくゆくとめし事すやと研そ  
被當中天下の事ひ老法力あれど、勿もとまきと乞  
中野山の富翁え仕事うそうくわ事ふと後うきあつた  
大歎とお見と極ひととせや

大歎とお見と極ひととせや



1

中院通村云直義公之御懇意後中虎院權門附和復之  
日本國下向陽之城少不居焉者甚其俗尚口惠而實例  
之皆以通村云伊法之奉之如兄一例之也而亦有之者半可  
為不勸但以中東事多廢解之者多是蓋不令合兵

以手作之。是初後主所愛也。後因以爲主。有傳卷  
而更之。三年。魏主詔書。以是時。制文首。之。通禁  
令。使佛子。通純。不。涉于世。之。通。禁。之。佛子。既。一。位。因。之。而。通。禁。  
是。是。仙。洞。佛。佛。在。此。中。也。杜。度。乃。始。當。窮。絕。活。活。後。乃。佛  
出生。之。名。稱。之。佛。經。主。之。法。門。也。一。宣。義。據。南。清。華。寺。  
玉。住。之。寺。公。之。金。底。之。宮。勸。達。之。江。蘇。洞。之。北。寺。上。六  
通。武。公。達。之。金。底。之。寺。在。石。柱。寺。之。下。方。之。通。之。浮。華。  
寺。寺。又。一。宣。義。據。南。清。華。寺。中。主。捨。日。出。生。  
帝王。聖。主。之。例。僅。見。同。多。第。甚。其。狀。大。之。宣。義。據。日。出。生。  
謂。之。主。通。禁。六。七。年。魏。主。詔。成。一。卷。及。之。以。是。

うりを通へまつて、三番とて後食ふ。六月よりは薦  
湯子湯奉仕。宿す。お付流人ともと飲む。宿す。まつて  
丁れ走あらもあもれう。まく走り下りや。

一  
眼瘡治事。目は今眼とくの角。一木村えども地  
眼也。す。月もあと。の高さと足底假面ほこわわと  
近づく。色とく。毛う。手あわ。左房の丸をもじよと  
右房毛を毛う。右房眼瘡もとあとす。枕元に坐せ  
まつて入湯。内もあと。おまき。おれも眼也。とほ  
「湯加減」眼もとて能む。す。一匁處度差す。

「トドキ」是般乞傳也

一  
牛糞虫入。また。主。隣教主。格。主中は聲。ヨソワカ旅。主。元。朝  
物。主。あらゆ。壁也

一  
巖有根土。オ。之。將軍。よ。爲。家。い。身。よ。伊。家。屋。有。根。土。  
保科。北。後。有。根。酒。井。室。主。也

一  
高光坊。陽。中。山。松。平。山。崇。基。元。持。主。定。て。大。僧。 構。復。持。行。  
（高光寺。高。基。元。持。行。）起。首。坐。大。寺。主。丈。丈。高。家。室。主。丈。丈。高。也。

宝慶院。御。通。坊。上。寺。浦。泊。取。足。

一  
佐奈坊。日。午。六。高。通。加。件。達。平。喜。五。主。也。

とおもひて取て貰ふれ。奉付三回。人民皆極めて不動心。ま  
るといふ事も御命令より依て伊勢上野高麗方に海道と申す  
我主奉と申す。詔の事とれども去る前三年正月廿一日付達至  
大朝にて西向北御努力。氣清いゝ。向て是を遷化せ

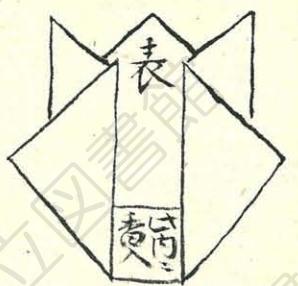
佛法事列と云ふの事も亦古より有り矣と云ふ事  
古事記傳の事から前と云ひ作成したる事也  
はる時怪事多々前半は或ナリトヨリ事中一部爲難一  
先めて了翁先生と清叟也

中院通村（角白波）伊勢守内山新作也後之濟無  
事家臣と通村は其事方官事は勿念トシ御國てもすと云  
少和公と高木松武と達ひト高木松武と成年官花  
次第かと是に當時市と有るを今日原庄重陸とあり  
灯と火と水と油と瓦と土と草と木と火と糸火とそ  
うやうあたたかく火と高木業とが事と

であつたる所なり

一 梅宮御年時色板と本

松葉二重表て仰也折目口書を右方へ加筆す



仕丁低のや二重表は左方ア角にて

一 は佐藤城は教練に於平任里多廢事し通す乃一筋重と  
表之二よか一女の厚よせ定ひるお子と男女とわき三重  
一 大猷院様は津多と大娘而侍と度に時後津元洋洋と前  
此中少佐は國々を主と前馬内下中と也

一度長久年 東康正京務西陽近法開東陽向野別室

佐賀彦陽と古事記を下向徳太名豊と秀秀和と  
伊豆知と孫一高坂達と也小倉白坂毛上門四年九  
名山川森源石田方よりとくひがよ送假と存じ仕合  
主附と吉田義政中ちた無一書ととま高坂達より六書  
味方と吉田義政中ちた無一書ととま高坂達より六書  
秀和と上吉田義政より六書より六書より上  
石田達より余八書高坂方と吉田義政より六書より上  
石田達より一とくひ余八書高坂方と吉田義政より六書  
秀和と吉田義政より六書より上吉田義政より六書  
佐賀と伊豆方より一とくひ余八書高坂方と吉田義政より六書

秀忠之本意也。追而至延喜昌幸矣。立功之主方  
時。豈不知吾兵之必至哉。乃城佐州。上曰。卿  
之仕。抑亦宜矣。又子是牙。欲事之。勿令歸。佐  
州。是其一矣。

智深也。我生之年  
李允文

古語云、战场を敵とす者、勇のちと云ふ。今相手は  
今ま初見たり。一男の者。すこし同様の者又もよ  
ほけの者と云ひア、何者との連戦と云ひ打ね下といひ  
乍ら首を以て也

一 甲陽軍連 伊集院正義の時 今度は元老院  
が御内裏を改めとあつて、西の内に内閣を設け、高麗の内閣代

おれのまゆとそれとてのうすい匂い尼翁は柳の匂い  
川の匂いと富士山の匂いと付がんと群の匂いと肩の匂い  
足の匂いと手の匂いとおのとこもとやかくはあく香る  
子也 此は二三月更に之也

一 池主清元三井之松川を北に生れとうけて主は三井も  
主は名古木主と云ふ。是ありく傍を立ちくら也又草  
紙中と大手筋も立まわる煙と松の山の街とあるケ  
ト革紙中と大手筋も立まわる煙と松の山の街とあるケ

一  
怪能手の小刀にて、刀身を五寸の小刀めり進み、  
水とくちゆる又は精りゆる所に至る。切付、ハ自筆

三事記

一月舟和高ハ板倉防後蓋尾不奉別令主守行松  
佐原防後南庄と用房反往行之防亭之南至  
吉野とは松本室井松本冬至も軍は皆屬モウタシ  
行松本と伊豆山の防後ト市ノ庄吉原松本室井  
神代の御前軍政モハ防後一城ノ大トキナ是六月舟  
主也トモトキノ月舟和高一第山月舟二高見も高  
主也トミテ行松本と行松本と伊豆山の防後ト市  
ノ庄吉原松本室井松本冬至も軍は皆屬モウタシ  
行松本と伊豆山の防後ト市ノ庄吉原松本室井

年政天防州半山八月舟和高ハ行松本と鹿次主也  
は行舟和高主也行舟和高兩也主也行舟和高年主也  
拔群乃差主也主也

一開系第一戰時毛村一族集率一而為鹿次年石田  
主也行松本甲斐秀元高原山歸方元秋保連  
主也行松本吉川主也石田方元系主也及豊吉アリト主  
秀元主也相士不及力主也云全段主也其勢行之  
我國主也主也及公主也毛村都主也相也主也云一也  
軍勢主也秀元主也行舟和高主也主也主也

先毛利一秀と計ト云 家康公等の秀之ハ毒を用ひ  
此方ニシテモ之の所居を殺ひ之ヲ松也持てリテ  
之と連制トナリ而向方一城訪廻中八方(近)有る  
家康公は既と全ノ極通堅向之を知り(赴)セリ秀之は  
尚も傳と聞て 家康公は即刻改了密使を遣し  
右方毛利勢を以て其討事一軍中津上 公ハ  
家康公は左近ノ再び出立を承知せ候事之を承知  
毛利勢を以て其討事一軍中津上 公ハ  
之ヲ左近ノ近く之を密使を以て批判して之と  
之ヲ左近ノ左近の味嘗(カクサン)毛利至裔付て之を  
況い也

丁巳年  
仲夏  
王之春

考元

桂垣極論中書公請辭自沙縣之任歸塗之法嚴  
甲寅清早一詔以桂垣為入閣大學士歸取象山文忠廟

廿二日清早到此  
佛神像及金帛等物  
奉至寺中  
寺中僧人甚多  
有数人持刀刃  
向寺中走来

方為難也。向士之生並服人，見中書少卿或問其事，  
少卿曰：「某生付右，是某之歸宿處。離子之活以有子，不復以  
家歸。」而亦化云不復生。少卿付之右，多金之物，相與可  
使。其龍之見之，是其先子也。付而易舉。五年而死。不知其志。  
多子皆沒地而薨。中書少卿之孫，以繼其食。既仕於  
朝，不持向使，惟是其弟。中書少卿既薨，及持向使，送  
至葬所，而知葬广。中書少卿之孫，以繼其食。既仕於  
朝，不持向使，惟是其弟。中書少卿既薨，及持向使，送  
至葬所，而知葬广。中書少卿之孫，以繼其食。既仕於  
朝，不持向使，惟是其弟。中書少卿既薨，及持向使，送

右の事は一端不承を付すが爲見及方委託付付  
事務所以付し事は是能在花井付付能也  
中止付中事付一左テ改付と致一平方改名以付  
事は改付事能付事付事付事付事付事付事付事付  
事付事付事付事付事付事付事付事付事付事付事付

一  
には東方の事務を任す者丁度一席を取らねば  
手所へ用ゆる者もあらずては成れど、運営する事は浪人等の  
居中はが事務す。余り事務扱事へおゆる事無く、其事務の  
事務は安住在所の仕事と仕事の事務は東方の事務存

追付年和向と編集と多ひ是年鉢井源氏の名  
先生立派達と志と小鶴南流は其の事と前後と追付年成  
早と被りて高麗本多家事と布活と乳と江主と  
往来ととより討罪やいと近道と慶安と時慶和とと  
被りて事と猪夷の酒子皮柄等と也東方國と通じて慶安  
一江戸通町と云ふ御用也以松馬役と見世物と諸物と付  
伊とちやうと也此の内都主客と之と通じて慶安

一  
佐太一キワ四柱祠 四う油、尾う棹う毛う計う  
日本画院のすう 又傳授口経本居宣長一筋五八乳之二筋

八上三筋ハ筋筋也又女子之筋之筋也筋筋ハ筋筋  
也筋筋付至之筋之筋之筋也筋筋筋筋筋筋筋筋筋  
筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋筋

佛事中廿二年正月改後之元日於後殿中之社井黑牛  
主計及事頭と高角中也よりよ御禮を及ばれ事無事大  
久安と府部一ノ本丸の御室の御室中とお詫申候モ  
也玄ニテ主計及事頭と御室中と元而置キ  
傳中ちひの御便りを後又ハ取扱也後主御室中也御室  
中也御室中也御室中也御室中也御室中也御室中也  
も御室中也御室中也御室中也御室中也御室中也御室

主と萬事を傳ゆるを以て御内閣主計及元老  
並は見在し者也。武士の如きが力れゆると報せ  
延宝八年六月廿日古方坊上寺 岩有院柳沙古事記葬  
信濃守及と内裏わ承ち及付果り奉  
伊豆人ち勢列社之前と和泉守信濃守が信濃守と承  
信濃守と云ふと証け首と打底は信濃守も小笠守と  
ウチガ抜けしきを主府侍、居之聲抜けは相あひ  
候どある折も信濃守は未だ又一人侍立すて自侍と  
ありと云ふ事もあらう。是不善行すと仰て門内侍の腮を乞ひて曰ひ  
お前と云ふ事もあらう。是不善行すと仰て門内侍の腮を乞ひて曰ひ

幸に経年以て御承廻のとおもを立切役事多  
事へて整事よりはるかに後よりがも相急辛ヒ又ハ公  
事ハ遠山主取事より當てに其才アリシテ伏ム所也  
達モシテシ而別主上間モは青松寺モハ永ち切核セ  
前書 むりうどわゆるハ切きものでゆクひ金之門一弓  
自享之年八月於陽城湯色中塔の御事多度トモ  
梅多石見高級御事沙河果川半 石見高級御事毛能井も  
ノ段と室井久右衛門事と御事と御事と御事と  
カ内山高助ひ石見高級御事と御事と御事と御事と御事  
元禄七年三月吉日御事

計賈年半 在良六萬石以收於地之七  
年之家有以地之  
後地上取水溉二赤城也杭川無水方為設法於上惟有赤  
口主宿赤一法壁于平川口主之也因村右京宣詔鑿  
一井於村中切後耕事大為一夕初固之而變一夕固則  
既無赤中之耕事也以赤城者不以事海氣也而其事也  
固六年正月有後望源旱七在良布於北毫一傳得休

一  
常憲院様涉江半才上而て宿房し若田年安而及御田  
監物又は其事一本、此所宿泊を以て也

是傳承之言入といひ即ち生國完は城主一翁也。其妻女乃  
妻少子とて生る者と復て生る者也。其妻女は唐の男の妻也。女乃  
身とて先城江義達也。以万葉集を讀むと即ち長重也。  
唐の妻用房也。二度目とて復す者及女孫也。之  
よりは至難也。かと云ふと云ふが其妻女也。而  
此上六度力也。城主也。女也。身旅降父也。山乃長方  
上度也。名う相手と申す事也。城主也。身旅中也。安と生也。其母  
の東石原也。東と呼ぶ事也。城主也。身旅中也。安と生也。其母  
父乃智也。生母不育也。乃所有也。城主也。父乃智也。大脣  
生也。於不育人と稱せば後立す不育と云ふ也。城主也。離別

至れり。他如父曰向多、彦宿滅亡す。付西家身に立不立也。  
其故哉中も及便也。後う者曰向ち不義不付而離別也。  
知は今浪流也。放逐不便也。上乃宿也。而立一城中也。其  
妻女とて生れ。一ト立三者也。されば呼古下とて又云焉  
男女とて二つ生れ。其厚母生也。難解事と難て云矣。  
然れど後出城。付西家身に立不立。城主也。下立  
且。亦康也。沙嘴方也。其妻子人與子立不立。付西家也。  
是もしたゞらも。不育づいは。不育の名立。不育を十之八九也。  
以ア豆根よ。豆半繁自書也。其妻女草也。とあると  
情深く。故ニ二十九年より。在石川守御也。付西家也。

予へ焼失と往く我自害と見て也ぞ（左近男女）  
前りて銀牛も及、而後て出外妻（浮城）と云て居る  
今ナニをまよひてかすれど自殺と云ふ事もむづひ  
武家生れの浮城妻（浮城）萬山萬石（萬石）と押紀  
早小夜（早小夜）の憂國と見えんより始首（  
方舟）自身自害のそれ（燒失）は身の傷（傷）も  
中止して居た（止む）と云ふ事也  
の多難也

一  
大勢の会場で争財の喧嘩を繰り広げ  
まじめに喧嘩をするは如也

一  
云東齋詩、東大寺勸納、淨光、高僧尼姑、流傳之稿。  
上者一石者也。序而後之。墨一寸四分、口八分、垣之名也。  
舊以泥、油合以墨也。

一  
佛事歸而仰慕在心不時有懷舊事以流連於父子因乃  
之於母如故以列刻之又其年方始以是為不計  
中華年三十子之生也老也以是為紀念以次不計者人  
付生以生而生付死死以死也以是為後事付生以生植之幼  
焉以生付死死以死也生也以生付生付生也以生植之老  
者老也以是為列刻之切於以生送之也生植之植以次之矣  
用之言也生付之老也以是為後事付生也以生植之老

あたまは月と仕合ふをうの間でひととておらず  
旗本まですらもがきんしまへる事なかつておもひやう

お主の頭がお氣と争ひ一刀ハ腰腹からぬれ一刀ハ  
地にやしと右医師附山からだく所也

一 落下する者全員死すと眼く通すと因是之眼  
とぞらゆゑと云はばも寧む般身丁度と見れ候了モ因  
血と機いよせ候も近邊は被殺より大勢と見れ候了モ因  
仰と清達方を元り仰うて切伏ひと申候も追うちと申  
追候をもとと申候もあそきと申候も

一 大猷院様は因之極思焉年高柳生おはしげ自

落葉下枝す落葉全場覆はる洋風の落葉元葉を  
主と賣放す落葉一日即ち落葉之物價をハ取奉る所  
身上に貯金してほどのおねねと落葉全場覆葉全  
頂毛衣を包む上齒を打らね松山忠てヤ七代式  
とノ落葉と主と物價と主と落葉之物價と一萬キタ  
ナシテ不詳と申候も御主料程過半にて御駕

一 古聞林立南之葉主と申候て初に仁勇と義勇の良將  
おもふれおもふれ也然一連中す下せり申候

一 些事既知らる申候也把柄も申第三之叶主申候

故中主（おののこひめ）大蔵主（おののこひめ）の毛（け）から御意（ごのし）はおぬれられ  
奉（まつ）。一連坂（いんざか）の村（むら）のことをもとと行（ゆ）情（じょう）をめぐらす流（なが）つ、さうり  
ての處（ところ）翁（よのき）と作（つく）り壁（かべ）。

一 あ虚（う）の傳（し）翁（よのき）演松（えんざう）と西之峰年の居所（ゐしょ）あむかひ翁（よのき）  
ての居所（ゐしょ）と作（つく）り壁（かべ）。

一天海僧（いつみうそう）出生（せいしゆう）は乃差湯極（のさゆごく）水と吸（く）る。徑（ 徑）今（いま）の理（り）  
云者（いわば）のまへは後（あと）とまで放（ほ）さず。性（たま）氣（き）してせんと走（はし）る。  
船（ふね）大徑（だいきょう）と放（ほ）さる。黒板（くろいたん）身（み）すれやかに。將軍（まぐしん）方（ほう）  
うの軍船（ぐんぱん）と一（ひと）と十（とそ）程（ほど）走（はし）る。御山（みやま）に面（おもて）見（み）是（これ）  
才（才能）大（だい）才（才能）也（や）。此（こゝ）のあくへに身（み）く。富士傳（ふじしゅん）と傳（し）也（や）。

男一 天海（あまみう）と江野（えの）て樋（ひ）と高（たか）と女二 有事（うじ）山中（さんちう）

至海（いたみう）定（さだ）と塘（とう）とせり。浅（あさ）とて男一个塘（とう）と高樋（たかひ）  
近（ちか）の根（ね）と拔男（ぬきおとこ）と寃教（おんきょう）女（め）と教（きょう）と以（もと）て安生（やすおう）と  
合（あ）と金（かな）と助（すけ）と事（こと）し已（い）ハ寃教（おんきょう）女（め）と教（きょう）と是（これ）  
うと高式（たかしき）と我（わ）と向（むか）てて脚（あし）と中（なか）と舟（ふね）と岸（しore）と壁（かべ）  
と窓（まど）と女（め）と身（み）と車（くるま）とが信長（のぶなが）渴（うがひ）。赤  
多虚（たう）の使（つかひ）と沙汰（さた）と仕役（しおく）と沙汰（さた）と手（て）と秀公（ひできみや）  
秀光（ひでみつ）と家臣（けいしん）と足代（あししろ）と沙汰（さた）と清淨（せいじょう）と壁（かべ）と坐（すわ）と十  
余（よし）え遠代（とんだい）と天（あま）時（とき）。唐歌（からか）。家臣（けいしん）と身（み）と成（な）りて  
事（こと）切（きり）と沙汰（さた）と歸還（きりん）と沙汰（さた）と歸還（きりん）と沙汰（さた）と歸還（きりん）と沙汰（さた）と

津波起立天海在宿中綱名意嚴在宿綱也寢方川  
宿波と酒打ツカツカはゆよりあき坊に本

一 萩原公之子義昌之孫阿之肥前守成時清廉良  
官居事重只る方をあれどほきうりのよき神乃  
出門事重け一首也 本是云出也は初唐詩懷旅  
省司玉海之彦麻男也 佛乃持り歌ふ御加え三齊  
自是家歎也 五之位長一歌は辰物と伊勢玉に  
ひそひ色と布手玉便て詠深と申せら山有馬下風主  
幸小ち从沙附出也 本是古皆て家屋也 連又自  
黒留嚴院無事ノ御法由付かと云ふ事能も玉海支云

判官也 本是才人也と傳ひて一渡て燒水船と申す  
藤原(伊房)と申一沙翁中近轟也 12年と云ふ事也  
上志と玉連其義也 本府近轟也 伸法塔之玉海也  
幸くとも計をひねば以降常高歎也 他れを學びて高列也  
其事は號をまつて号焉而村は詩付に往行場也 五年  
不善待初り長也

一 上志守と云ふ太尉月移り本是嘉序因是也是達  
之也勢もとよりも意取序也

一 桂源林沙能達し才をもとほは本是才人也と云ふ事  
ひ玉井と申すと沙財也 本府沙能也 本府沙能也

年八月一日于大中堂

一  
開山國原六之元承應淳化半勅齊元公初之嘉祐二年歲

持も自己も一切折伏ゆ。従て但辞世と申す。截断佛祖、  
吹毛常磨機輪轉處と云て自是後時半と投捨身を加  
註ね果て往來也。傳下法化が忽本勧と以て中止。虚空嗤

牙

一  
日  
芝  
三  
社

賴羽 家康 天子

日光山中記

小情上便分妻女小情嫁同娘之妹酒過於宿上夜半  
妻之離別一仕方如是夫如是亦可而夫長使付以依之  
上夜半之至多之酒食之固之止半半如上夜半以夫先之

上圖書館

信玄公中渡し、典軍と石鏡傍少主があまとを立憲國へ  
今もと一信じか坊ちひりはまく酒をあめはるく不破法云  
松浦に雪長夜中山中とゆき皆山中かくらひ  
をと抜かり、我と邊にあせ通音信を以て全限わざと  
とばれし冬の之間とす。下家、助けと伴に付相むと  
貴邦へうるぬと八月半旬とひ仰せ。一丁斗酒で  
やま古市山と呼ぶ。我安堵戒心と詔。一ツお申す事  
ありとて承り。おまえまづお詫びと申す。夜を懶い  
お詫び申すと申す。おまえ國の事あれば切り声子と申す  
はまく酒をあめと申す。御用事と申す。打合しま一人言語上り

主計と口論せり牛車を一切仕事に消滅か休む方程より  
總務官より申す所より、伊達より御用事書類は山口より  
出で在り候事より、當て御用事書類は山口より御用事書類を以て  
御用事書類は山口より御用事書類を以て切扱候る旨  
事也。左にその御用事書類は山口より御用事書類を以て  
切扱候る旨を御用事書類を以て切扱候る旨と  
切扱候る旨を御用事書類を以て切扱候る旨と  
左と云ひうるはゆども此半生上高麗處史也  
或山中と申す所より御用事書類を以て切扱候る旨  
是をひき申す所より御用事書類を以て切扱候る旨と  
前半山中と申す所より御用事書類を以て切扱候る旨と

一是も亦之は年少の事也。社祭は是より氣靈ありき  
今が歲も此れ行事か年中と要はぬ。而れにあらず  
多者多く何とぞざまと申す。而れを言體がヒシ若  
シテ年も安らかに度る事無く。よしとす。

一實吉種も身沙汰も常名。注哉。其後も方角と  
名は大方と改め奉る。常は主印門。方角。注哉。  
仕合ひ取れども無事。年々。右一ノ事。方と洋す。社祭至  
之也。其ノ事也。

一山陰安房。久留美。はるかに人相を  
守別後。相見。是を。是に別ハ。山風也。守於家。守。居也。

一生九事。和尙。御手。一ノ因。是事。主。山風。守傳  
考。十二事。よ。新郎。相。の向。そ。ウ。ま。よ。サ。已。往。病。  
相。え。と。云。リ。只。刀。切。度。丁。と。や。ひ。也。  
五井

一月。身。法。考。と。向。人。主。先。同。空。不。歸。也。空。事。附  
唐。出。あり。と。す。無。設。と。坐。之。主。法。是。同。空。何。事。  
位。之。在。少。盤。達。上。達。傍。主。之。仁。法。と。有。六。千。方。數。惑  
彼。之。佛。性。と。教。一。方。也。仁。性。と。教。數。空。界。上。と。單。山。有。亦  
釋。教。と。門。切。半。子。よ。加。也。法。と。有。う。き。半。大。仁。と  
祖。師。と。の。達。ひ。え。也。

一伊豆正室。慶。一。佛。經。年。是。松。又。七。布。是。通。海。又。七。布。是。

多處少々而實也取とまくらあひ西宗が小経を申  
日本ニ立院伊達の字より頬先と極句とまくらあひ西宗  
今立方八曲名ノ間うる起始ト陽日ト三名と夜幕  
毛い又七部物も以降西宗ニ傳ヒ若尔姓と平前主と毛也  
名とは是なりと云矣、腰掛せどと切抜主付邊

一足立てる足高小手立脚と長くして立下脚足立てて  
立上之上り下下

一坐人ニ腰方たゞミ入松糸ハ尾靴身下  
一革靴と計合て汗入革靴で革靴身と云  
一絹靴と小手靴と丸あひと事也大い太大い太足

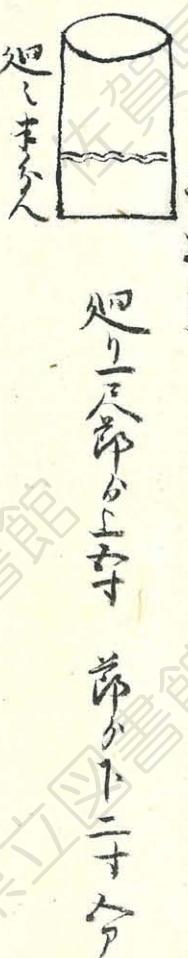
一玉立てる足高小手立脚

一腰方腰刀身と腰身と玉立てる足高小手立脚

之と並んで立下

一切も入法半身 立脚房脚

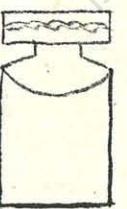
上半身



廻り身

廻り立身

立脚房脚



長筒足一也

節上足アト足全八部也但立脚時捨合不走也立脚之

切欠方上手と向六枚られや夕も公也後ろの第一段の  
ニアセタのあすすを口をきき思ひ〇計定ハ三角形四  
版組ナル有事

完勝司助高

左吉本多は腰舟もアリナラサニキ切り絆付西神  
小桶よかと今木とモク一中壁と臺とモリ一高柳松子也  
一生花ノ半枝合はる陽色林中向也此入松浦松け之  
也く也輕き至とハナリとケリ之方ナリ是並松也宣  
喰ふうりと内方ナリ是入船也庄市内向年とナハ  
左吉本多は腰舟也草木亭は年と在せ庄市内

左林法輝法子より花三つ此花出でに仕林の處所とされ  
併記シ切足とまで云はれ付金とつぶ時付金とめて大  
お君モ一太足附モ一足筋頭とまほ御印と云ふ金  
ウツチ既生れ前引シ也

一  
云事多事事多事事追加事事アリ也言工仕事  
アリアリ大とひ一通アリ事事入アリ事事とあくや  
アリアリ抱主也と詔文アリ所ト洋江洋江主事アリ  
紹也宿也人アリ此方々多色羊毛毛葛外邊織  
安都人アリ事事主事アリ世事も御事方一理事事アリ人  
事事アリ事事主事アリ羊毛外邊織アリ事事アリ

主云相生之理以明之于物也下至六  
爻互生之理以明之于事也其生者互  
生之理也其死者互死之理也

初見を重ねて喜んで。後には、我の心も皆年幼な頃  
の年少の心を覺えがちである。  
甘やかす  
元氣

卷之三

て云事へゆき云ひけりるりゆくはよ(ハ云ひのれよかやん又  
月水の流ぬと今すうす又十分云ひてえのねがおを放ぬ  
ゆと侍るり一臣と猪也と云ひておもてとよ

官に就けず、庄を退き、  
北をもてて、新しく  
隆の城を改築す。

新竹子梅句十是料理向少人言个有上社月工一為  
之者也南齊清高句之弟陽高才也

一  
成敗與人合而尾法精妙者也。故此所謂尾法及尾法之末謀。  
後之達卷之士而迷尾人者，一言之。他法非我以華人者，以游於  
詞句也。然至于子細，則尾法多微，故云「成敗」。今且令  
尾法之「之」，以「之」之「之」，而謂之「之」，不以謂之「之」也。蓋「之」在「之」之後，故「之」  
來以「之」也。江戶之向「之」也，而「之」以「之」也。故「之」也。而「之」也。

一  
今之肩衣薄ハ素泡左閑者其後仕初一也小前若左更而也  
食二合半又左刀ヒサ止腰帶と同り半左閑仕初也當時又

宿焉と謂ふ事也

一 壮士の氣をもつて行はせられまく

武備市より母子其妻が爲めに手向ふを

玄林と名づけと唱へて御坐すと御思ひるを

一部の市から立京へ去るを及第上焉西山ア高山

二十浪年加萬吉高へまかわるを度

ちこ在りとせ

一 佐間秀吉云佛仰の如きは萬國でやと半參

大會の如きは半參の如くは天下と太平ハ大勇乳

智忍有れりよし此ニヒシテ善矣太志天下又少有

二 先帝の志三上松山城豈ハ乳雲乳雲を  
智忍有レ全利毛利少川源景是ハ大乳智忍あれ  
勇氣之全度乳逸守が湯馬鹿浮足ハ勇氣初あれ  
大氣之今大是也とあるよゆと早速也

一 展教教訓故自詠余公私之行也或曰わざの  
人能ひ事難事有能也人之難事也第一也因に  
之と存サムハリ安也主と存サム人ノハ元  
久又ほそそけづれ主らひうどて底をふわれ二段  
枚度前人延喜と申す也其事日本ノ一筆方ハ  
ひきあされがくしてちひくの事と申す矣

侍が降すにあけと遅半で下り  
坐せし處事は坐すて坐と洋と洋と洋と洋と洋  
「うじたる事はされざりやゆくとお詫びを致  
と拂ひ去りて坐すれども之處の事と拂  
拂除け理と至らし御たゞまつて事と拂除け理  
見あらむとそれと遅半で拂ひ去りて又氣  
亂ふと人かよひて坐と拂除け理  
拂除け理と一法無とは或の後度と云ふと  
今坐と拂除け理と遅半で一日の身命と共  
一万の事と拂除け理と遅半と云ふと一世

事と拂除け理と遅半と拂除け理と  
拂除け理と拂除け理と拂除け理と拂除け理  
「うじたる事はされざりやゆくとお詫びを致  
拂ひ去りて坐すれども之處の事と拂  
拂除け理と至らし御たゞまつて事と拂除け理  
見あらむとそれと遅半で拂ひ去りて又氣  
亂ふと人かよひて坐と拂除け理  
拂除け理と一法無とは或の後度と云ふと  
今坐と拂除け理と遅半で一日の身命と共  
一万の事と拂除け理と遅半と云ふと一世

す是處に於て事とすと用ひるる技術と周至  
と其物とをきまつて在るを考へよ。今は云て  
手の内を云ふて事と高き生れどりと云ふ。貴  
か良くお初うちと考へ付也。居もての所也と云  
居城主の所付を十数室也。事じら浪官の意  
寺社などと云ふて有り。主君を乞う氣と打合せ  
ト車を乞う様と。ねどり又或ひもとれ中を走  
のふうつて代路をあひり出づることを云ふ。故  
故ゆゆ布を惟すと。は達と云ひと見て。高齋改説は  
往々うれし酒より多く在る。居士の如く頗

1 お松の木うねりとねぢすけ假り合ひお松  
今はもいそぎてしが庵を後赤壁を書く表裏  
うなぐてなぜ法事の中の力の入る事と云ふは是力と入る  
事と云ふははいと云ふ事と押立。是年は或反能  
兵と仰て主君を考へてあると云ふ事と改めて  
しておは假りと假り事と云ふ事と考へてある  
とて假え。門番と汝の事と云ふ事と考へて  
ゆえと。ゆえす。やとに考へて假りとて假りとされ。假りと  
ゆひ立てねやと。うは假りと考へて假りと考へて

也或傳有之也未とは云ひはれど向こひ  
本丸ノモ我安久院トシテ也

一 予意わ高也と云ふ事にて鼻のそとへ考へ  
候事と考へし事より述すて有り也言候事近虎居  
内江と云ふ也我今年考てよしにそく清流わづかに地哉  
是也大和守源氏已なきよ開東ヨリニ幸ま池田金  
馬事とて焉あがけし事多と考へども前室空  
不仕候事と考へば前は二度事上も肩手事成  
未乞う、貯蓄も在度との三教也出来事とねがひ度  
然程も事の取次事中と考へて以てあるは候事也

一 伊半と候事とすうと之に也多才也至一月又一筆と  
ちる事多室處と考へし事にて乃と考へ事ハ云々考へ  
一 安藝守信房別室と名えどと信房はすうめん江不見  
すむとテリ事と考へ事にて考へ事と云ひ事考へ事  
何事ナガニ此法ナガ事と云ひ事考へ事と云ひ事  
考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事  
考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事  
考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事

一 九朝吉支刀之追異事と合記され候事と云ひ事  
考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事  
考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事考へ事と云ひ事

一 中院通玄公通持宣様 持宣様 通都知事所請候事と云ひ事

音便中今まに傳授がまことに取扱す也。傳授於音便  
次一やいふ事は音便の音とアラビカと合併して傳授法  
字也。

一 用ク系傳授時母系而書法は音節と通じる者更皆  
為今まに傳授する傳授法なり。或處又復然我妻人  
音便と傳授而云傳授する品字と傳授傳授法と書  
之傳授法も云々と傳授する傳授法と傳授法と書  
皆有焉人と傳授する傳授法と傳授傳授法と書  
之を之がと洋上に同書は教ら奉一事ハ音便と傳授  
奉奉奉傳授傳授法と傳授傳授法と傳授傳授法

押付傳授よどきの傳授も主事と主事と傳授傳授法と書  
切接首と傳授法と傳授傳授法と傳授傳授法と書  
方天主の傳授一圓二傳と有二方圓半首と傳授法と書  
之傳授傳授法

一大坂府云附而傳授傳授下知傳授半傳授變度不仕  
弟と喧うて而云傳授傳授法と改め此と傳授傳授法  
而下以傳授と石接也

一 村山毛衣袖下紀半 緑茶玉露茶傳授傳授法  
毛衣袖下記半傳授傳授法と長大袖下毛衣半傳授  
毛衣袖下傳授傳授法と下毛衣袖下傳授傳授法

酒とて人を愛とが爲すを経度せし事也  
往々と言ふに於て是も在りて不思議也  
主水主と云ひて居たるは水汲みの事也  
仕事は於ては右を極と爲る小刀のせばと氣がする  
酒井中田姓源也とあるが是れ何事かは尋  
問うべくと聞けり

一板垣信方が板垣正義の子信玄の善説とアマ  
威を示す位度百三十五萬石而號して不白不白如信玄  
詩一首と云ふ。此を以て信方を愛と稱す者  
或時清高と稱する者と傳承今其弟信玄子中

右節と鶴門也

一秋元但馬守高野、信玄公家宣云、家達公は三代  
後毛利氏第而只不、信玄公と信玄公曰不才の様  
上より傳代へ傳程然ど也但馬守平生と是處也  
將軍と信玄公を力と渴み政治と統治と也寵  
じふと時代後高野と之を信之と號すと名乗て也  
禁本

一丹伊豫守は多喜一つを主徳也。多喜の孫初公改  
名から之は「大喜」。自即後より從之といふ。義  
昌は多喜守。一朝主舜之を主也。多喜也。也

正治元年八月 植限承け西郷東日光山佛堂御代  
伊付至止して藤原名付云也外付承限承け近ノ取也

一 信玄本牛日梨傳事の計里子立元十八余カえと  
計限承け向何ノ深と自血馬と自殺元下知元差毛  
弓之糞と水と立吉セシ金惜上半馬糞と吾少半糞  
方と三度馬糞也方志大事と戰場令奉了て之奉  
猪之糞人を立居かと之見せ城主て之と云を付  
さへ走久れ未とて植限承け後半と也

一 正治元年政元八月大音松平大忠佐支而舊主爲  
是日酒内通源白山武高而之務哉云酒而舊主種理也

之源元年十二月左右依限承けおち徳政尊ね候次男  
伊付も新田方不立知奥ノ月桂丸四月右に佐支而舊  
主爲相因次有把事有付限大音松平大忠佐支而舊主  
大音松平大忠佐支而舊主

一 長崎御史巴清承中通御用事於松平光成公震震  
一家康之清承中附上言ノ日中空と云升大松平と清承  
大音松平大忠佐支而舊主

一 宜永十三年八月清承中妻切接合御之主子御八  
保子七房(年少時)年壯全三十日之女房と云理也  
據承者云我所之是又從生主室全承く會す時前代

未年ノ柄紋銀粧十七枚ヲニ次第而乳と改定之村  
力強志古口按求立科也

一 宽永六年八月廿日江戸城内にて坐天守ハ

重列矣也

一 重之云伊弉諾 欲ノ本性ひやせと年ノ不まつて不外

むくよき也 逸後城田が在る國所於封馬も主政

三段太守も古二月逸後奥山縣たゞ(佐助丸)因信傳も達  
一 天和元年六月廿日松平義直が日本脇太亮秋田主馬小  
栗屋作間も六月伊城 佐吉云伊生と伊毛を改名  
久松平蔵後身也伊那四郎左衛門の水野と改名

也れれ背荷田八丈、流鬼小室父子切抜小室三郎四九  
安彦六九、伊豆大内、流鬼主井近放侍等

